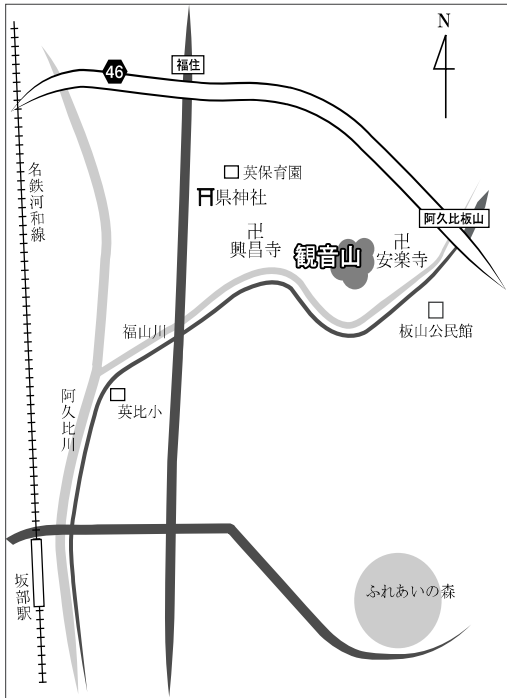


シリーズ

阿久比を歩く ④1



観音山に生えるススキ

今回から町発刊の「阿久比の昔話」の中に登場する「伝説の地」を求めてぶらり旅に出掛けることにした。
第二十三話「金の鶏」に「朝日の当たる一本すすきのもとに金の鶏が埋めてある」という伝説が残っているところ。場所は板山の安楽寺の裏山。話は「昔、この観音山のあちこちを掘って回った人がありました。でも、どうしても金の鶏は出てこず、そのかわりに、たくさん小さな五

伝説の地を歩く(金の鶏伝説)

あぐいぶらり旅

輪塔が掘り出されたそうです」と続く。
友人と「金の鶏」を探しに出掛ける。安楽寺を訪ねる。住職は境内西の墓地の方向を指して「観音山はあの辺りです。伝説の話は聞いたことはありません。詳しいことはまた調べておきますね」と話してくれた。
観音山が実存すると分かったので第一関門をクリア。境内を通り抜け山に上る。観音山一帯には墓地が並ぶ。朝日の当たりそうな場所です。一本すすきを探す。
立冬を過ぎたせいか、草木の葉の色は茶色くなりかけている。丘陵地の土手でススキを発見。まさかこの下に金の鶏が眠っているのでは」と考えると気持ちは高ぶる。だが残念なことにはそのススキは「一本すすき」ではない。周りをみるといたるところにススキが生えている。しかし話の中に出てくる「すすき」がこの場所にあるということが確認できたので第二関門をクリア。
「観音山」「すすき」までたどりつ

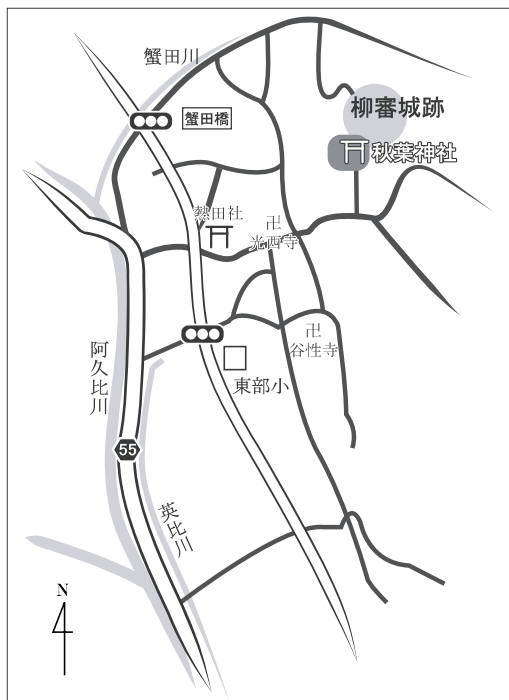


観音山からの眺め。下方は安楽寺

けたがこの先には進めない。何も手掛かりがない。まさか墓地が並ぶ場所を私たちが勝手に掘ることは出来ない。
おばあさんが墓に切り花を供えている。「金の鶏」伝説を知らないかと尋ねてみたが、首をかしげるだけでニコニコしながら私たちの前を立ち去ってしまう。
あまり欲のない二人なので今回はここまでしておこうという結論に至りぶらり旅を終えることにした。帰路の途中で、友人が急に「あのおばあさんきつと何か知ってますよ。ニコニコしているだけで何も話してくれなかったのが怪しいですよ。沈黙は「金」ですよ」とおかしいことをしゃべっていた。

シリーズ

阿久比を歩く ④2



柳審城があったとされる秋葉神社付近

宮津地区の秋葉山（現在の秋葉神社付近）に「柳審城」と呼ばれる城があった伝承が残る。
元寇の役で殊勲を立てた新海淳英が築城した柳審城は、天文十二（一五四三）年七月、水野軍に取り巻かれ四面楚歌の状態。
時の城主新海淳尚は家臣らを前にして
『そなたたちの忠節、わしは忘却せぬ。しかしながら、わしの身はど

伝説の地を歩く（柳審城）

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

うなつてもよいが、そなたたちだけは生き延びてもらわねばならぬ。ご先祖様には申し訳なきことながら、城よりもまず人じゃ。ひとまず恥を忍んで、野に再起の日を待とうではないか』
声涙共に下る主君の決意に、城中の将兵はみな泣きました。
こうして、永い伝統を持つ柳審城は火災に包まれ、その跡は、むなしく夏草が生い茂るのみとなりました。（阿久比の昔話第二十話 柳審城の落城から）
柳審城跡へぶらり旅に出掛けた。宮津熱田社の前を通り、光西寺の方へと歩き、東に向かう。少し行くと秋葉神社の入口に着く。
目的地を目指し、長くて急な石段を上る。運動不足の私たちには結構きつい石段だ。息が切れる。
頂上ではモミジが紅葉して美しい。薄暗い森の中に社がひっそりと建ち、北側は公園となっている。城跡といっても城が建っていた形跡は全くない。ただ、西側を望むと町が一望

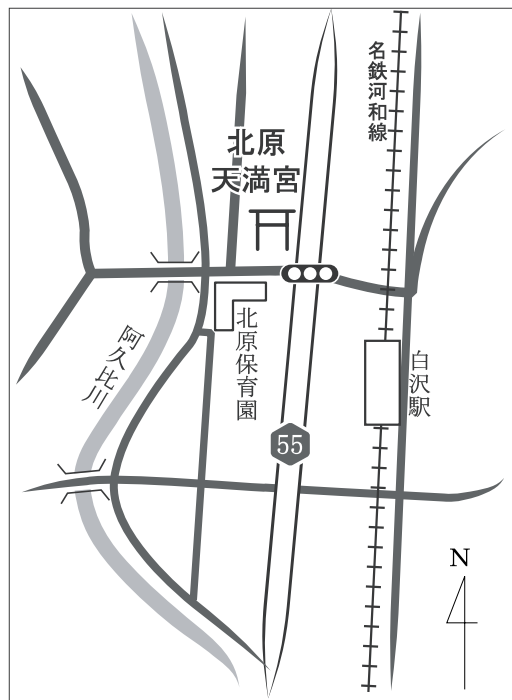


秋葉山から一望できる景色

でき、山城を築く場所としては最適だ。
公園でグラウンドゴルフの練習をする男性に、城について尋ねると、城があったらしいという話は、聞いたことがあるよ。昔からこの辺りは私たちの遊び場だったからね。お城なんて意識したことないなあ」と答えてくれた。
柳審城について町誌などの解説からは、残されている文献が少なく、詳しいことはよく分からないと説明されている。
「昔話では柳審城は落城してしましますよね。一国一城の主は、いろいろなものを守らなければいけないので大変ですね」と友人が話し掛けてきたので、人生の先輩として私は「大変だけど楽しいこともある。君もいつこく者をやめて、早く一国一城を築いた方がいいぞ」と助言をした。

シリーズ

阿久比を歩く ④③



白沢地区の田園

「英比磨が初めて荘内を巡視したとき、入江に大河が注ぐ河口付近は、広い沢地になっていました。そこには、丈の高い片葉の葦が一面に生い繁り、かれの来訪を歓迎するかのようになり、数百羽の白鷺が群れ遊んでおりました。かれは、その美しい景色に見とれて、長い間たたずんでいました。この地を『白沢』と名づけよう、ここを開拓したら、きっと素晴らしい美田となるに違いないと考え

伝説の地を歩く(英比磨伝説)

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

ました。(阿久比の昔話『英比磨物語』から)。

阿久比の郷を開いたといわれる英比磨。その英比磨が訪れたとされる伝説の地をぶらり旅に出掛けた。

英比磨の住居地跡だったとされる場所、北原天満宮に立ち寄り、西の方へと進む。阿久比川を挟み、田んぼが広がる。

友人が田んぼを見て「美しい田園が広がっていますね。英比磨さんのおかげですね。あと白鷺が出迎えてくれれば最高ですね。田んぼに水がたまっているのは、沢地の名残りですかねえ」としみじみと話すので、私は「きのう、雨降ったよな」と軽いツッコミを入れて話を流す。

物語に登場する「片葉の葦」を探す。書物などで調べると、葦は「沼や川岸にはえる多年草」。片葉の葦は「茎の一方にだけ葉があるという葦の不思議を伝え、その由来を説く伝説が各地で、七不思議の一つと数えられている」とある。

散歩をする人たちに声を掛けるが



片面にし葉が付かない「片葉の葦」

誰も知らないと言う。インターネッ トで調べた写真が手掛かり。半ばあきらめかけ、北原保育園の西を流れる阿久比川の堤をのぞく。その瞬間「あれだ」と二人で大きな声を上げる。写真と見比べ「間違いないですよ」。「きつとそうだ。よね?」。

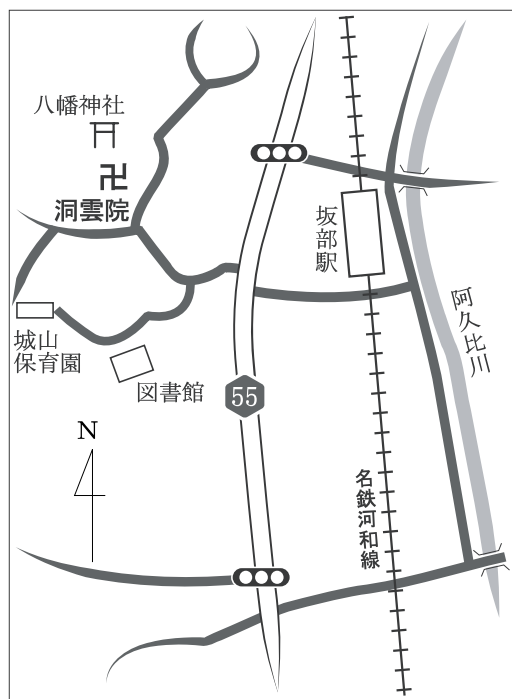
一面に生い繁るとまでいかなかったが、川の堤の一角に群生している。確かに片葉だ。伝説の地に生えるといわれる片葉の葦が残るのは、やはり何かの因縁だろうか。英比磨が訪れる前に、何かこの地であったのかもしれないと、勝手に想像を膨らませてしまう。

友人が「ピタゴラスが確か『人間は考える葦』と言ったよね。それってどうゆう意味ですかね」と尋ねてくるので「意味は知らないけど、ピタゴラスじゃなくてパスカルだったような気がするけどな...」と二人で首をかしげながら帰り道を急いだ。

次号も英比磨伝説を探しに出掛けます。

シリーズ

阿久比を歩く ④④



洞雲院所蔵英比麿の縁起巻物

「さて、この莊の開祖と仰がれた英比麿は、天寿を全うして、永い眠りにつきました。里の人々は、慈父を失つたように長い間悲しみにくれておりましたが、英比麿夫婦の木像を造つて、最近まで、各家へ一日ずつお迎えし、立臼の上に新しいこもを敷いてその上に安置し、親族縁者を招いてお参りをいたしました。これは、英比麿はいつまでも生きておられて領内を巡視してくださるのだと

伝説の地を歩く（英比磨 伝説）

あ

2



了



いう思いで、その徳をたたえてきたもので、この地では『回地頭』とか『回地蔵』と呼んでいます。英比麿の墓と回地頭の木像は、坂部の洞雲院に祀られております。阿久比の昔話『英比麿物語』から。

洞雲院を訪れた。回地頭を見せたいだけなのかと住職に依頼する快諾してもらえ、本堂の奥へ案内してもらった。回地頭は立派な厨子の中に夫婦で安置されている。

住職は「回地頭信仰は江戸時代には、半田の乙川や亀崎地区などを含めた英比十六力村で行われていました。明治時代になると、この寺にまつられ、母屋を新築した家主が寺から借りていき、一週間ぐらい客間にまつて家の繁栄を祈りました。英比麿の祖父菅原道真公の天神伝説にちなみ、雷よけの信仰としてもまつられていましたよ」と話してくれました。

「寺に伝わる英比麿伝説がありますか」と住職に尋ねると、『尾張志』の記述にもありますが、英比麿が五

歳のとき、都から来た勅使を出迎え、腰をかがめて会釈をしたら勅使が口ずさみに『をさな心にかがみこそすれ』と言ひ掛けられ、英比麿はとりあえず『英比の子は生まるるよりも親に似て』と付け加えたそうです。海老の子が生まれたときから腰が曲がっているように、腰をかがめて会釈することは、生まれたときから親にしつけられた当然のことだということを意味しています。『英比』と『海老』の言葉が掛けてあるんですよ」と教えてくれた。

「今年も良い年になりますように」と本堂に手を合わせる。境内を出てから私が「聖徳太子は幼いころからすごい人物だったらしいが、英比麿もすごいねえ。僕なんか五歳のときは仮面ライダーに夢中だったかなあ」と友人に話し掛ける。友人は「僕は太陽戦隊サンバルカンに夢中でした」と変身ポーズを私に自慢げに見せてくれた。



洞雲院所蔵の“回り地頭”

シリーズ

阿久比を歩く ④5



唐松の井戸

「大師を見つけた一人の村人が、『どうかお助けください』とすがりついてきました。そつとうなずいた大師は、そばにあった井戸をのぞいてみると、やはり一滴の水もありません。大師は、道に落ちていた一個の石を拾い、泥を落として『南無妙法蓮華經』と書いて井戸の中に投げ入れ、一心不乱にお経を唱え始めました。村人たちも、手を合わせて、一生懸命

伝説の地を歩く(唐松の井戸)

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

命お祈りをしました。すると、不思議にも、井戸の底からチヨロチヨロと清水が湧き出し、やがては井戸いっぱいになり、しかも水面には、緑の松の影が映っているではありませんか。(阿久比の昔話『唐松の井戸』から)。

平安時代、淳和天皇は鳳凰という吉鳥が何羽も群れをなして尾張の国へ舞い降りたという夢を見る。天皇は比叡山の慈覚大師円仁に「尾張の国へ行き、鳳凰を見てくるように」と命じる。大師は途中、知多郡英比の角岡村(現在の棕岡)で日照りが続き、田畑の作物は枯れ、飲み水さえもなく困っている村人に出会う。水の無い井戸に祈とうを行う。不思議なことに井戸から水が湧き出し、村人を飢渴から救ったと言われる。

「唐松の井戸」を訪れた。井戸は町道すぐ脇の田んぼの隅に位置し、周りには大きな石が積まれ、四方が木の柵で囲まれている。井戸の中をのぞく。かなり上の方まで緑色に濁った水がたまっている。

スーパーへ歩いて買い物に出掛ける途中だという女性に出会う。井戸のことについて尋ねてみる。今は飲めませんが、昔は飲むと長生きできると言われ、正月になると三河の遠方からでも水をくみに来る人がたくさんいましたよ」と教えてくれた。

「ぶらり旅毎回読んでますよ。頑張ってくださいね」と激励を受ける。

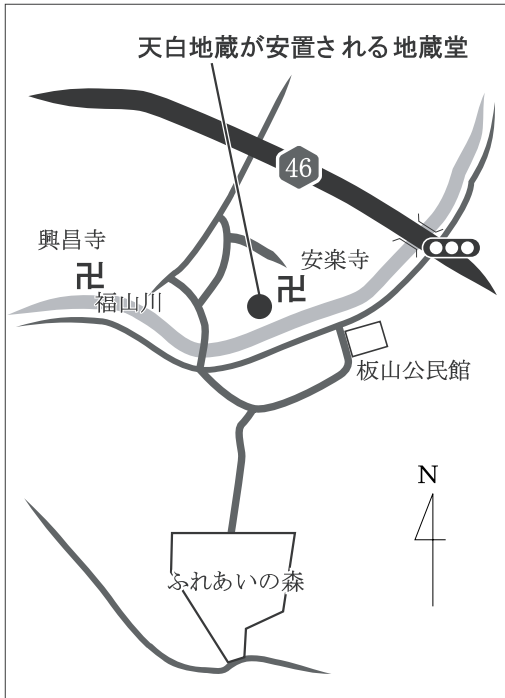
「いつも元旦には井中に松影見ゆるとなん。されども近きあたりに松の木なし。『尾張名所図会巻六』で唐松の井戸について記述されている。地区の人が井戸の横に松の木を植えても枯れてしまいうらしい。松影は井戸の中の水に特別な時にしか映らないようだ。不思議な力を持つ場所なのであろう。

水面に小さな輪が何十にも広が、底から泡が「ポコポコ」と浮かび上がってきた。友人が「井の中の蛙というくらいですから、多分カエルのおならですよ」と話し掛けてくる。

「その例え、今の状況で使う言葉じゃないし、カエルはこの時季、田んぼの土の中で冬眠してないか」と私が答える。それじゃ今の現象は何だ。もしかして松影が映し出される前ぶれか。再び井戸をのぞき込み、しばらく眺める。緑色に濁った水が見えるだけでほかに何も現れなかった。(くだらない話をしている間に、松影が見えていたのかもしれない。とても心残りだ。)

シリーズ

阿久比を歩く④⑥



正面奥の厨子に 天白地蔵が安置されている

『わしものう、耳が遠なつたことがあつたけど、天白地蔵さんにお参りさしてもらつたら、よう聞こえるようになった。おまはんも、柄杓の底に穴をあけたのを持つて、安楽寺へ行つてお参りしたがええがの』。おばあさんは大喜びで、早速新しい柄杓に穴をあけたのを一本と、大きな巾着にお供えの米を詰めて、安楽寺へ行きました。

お祈りをし『さあ、その柄杓でよく耳をなでて、お地蔵様の前に置きなされ。きつとお地蔵様がかなえてくださるからな。一週間、毎日お参りに来なさるがいい』。おばあさんは、毎日新しい柄杓を持つて、七日間お参りしました。七日目に耳をなでると、柄杓の穴からスーッと風が入ってきたような気がしました。そしてそれからは、昔のように耳がよく聞こえるようになりました。『阿久比の昔話 天白地蔵』から。

天白地蔵がまつられる安楽寺(板山)を訪れた。地蔵はその昔、福山川上流にあつた地蔵池の堤に立っていた。大雨が降ると池の水があふれて福山川へ流れ込み川の堤防が切れた。地蔵は堤防が切れるたびに「天白」の地へたどり着く。村人たちは天白の川の堤に小さなお堂を作り、地蔵をまつる。その後は福山川の堤防も切れなくなる。村人は「天白地蔵」と呼び、耳の不自由な人が、穴の開いた柄杓を供えて祈ると耳が聞こえるようになったという話が伝えられる。

「おばあちゃん耳が聞こえるようになるといいですね」と友人が話しかけてくる。「そうだね。ところで、君はお地蔵さんに向かい二回手を打つて、お参りしていませんか。神社と寺では参拝の仕方が違うぞ」と私が言う。「はすかしいですよ。穴の開いた柄杓があつたら入りたいくらいです」。「それは無理。無理」。

寺へ参拝に来ていた夫婦に声を掛ける。天白地蔵の存在を知らない二人に私たちがいわれを話す。毎月お参りに来ますが、お地蔵さんにそんな不思議な力があるとは知りませんでした。少し耳が遠いおばあさんの知り合いがいるから今度教えてあげようかなあ」と奥さんが言葉を残してその場を離れて行った。

伝説の地を歩く(天白地蔵)

あ

ぐ

い

ぶ

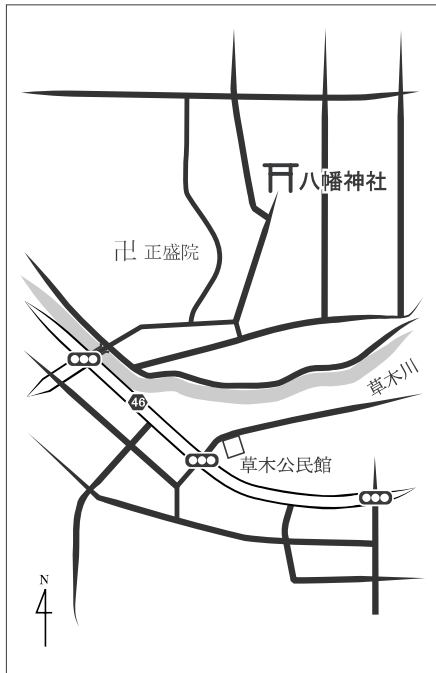
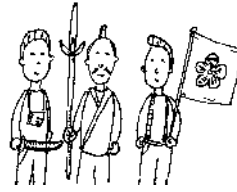
ら

り

旅

シリーズ

阿久比を歩く ④



八幡神社由来が記された石碑

「……木下藤吉郎や兄者たち、水野どのや久松どのまで取りなしてくだされたのだが、きついお怒りは解けそうもない……」
『……お力落としてはなされますな。いつかは、きつとお許しが出ましようほどに……』
『……ここしばらく縁者の前田与十郎どののもとに置いてもらって、そなたたちにもいい世話になったが、近く美濃攻めにかかられるに違いないから、荒子で次の機を伺いたい。それで、多左衛門どのに頼みが』

伝説の地を歩く(鎮守の神宝)

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

ある。これなる刀一振りと旗一流は、わしがこたびの戦に用いた品、戦勝御礼と心願成就を祈るため、ご神前に奉納したいと思うのだが……」
『はい、確かに私がお預かりいたし、末永くご神宝としてお守りいたしましう。』
——多左衛門は、街道を次第に小さく遠ざかつて行く馬上の影を目で追いながら、いつまでも立ちすくんでおりました『阿久比の昔話 鎮守の神宝』から。
戦国時代の武将で加賀百万石の礎を築いた前田利家が、刀一本と旗一片を寄進したと言われる話が残る草木地区の八幡神社を訪ねた。
前田利家は尾張国荒子(現在の名古屋市中川区)の出身。永禄二(一五五九)年、主君織田信長がかわいがる家臣十阿弥を斬殺してしまい、信長から出仕停止処分を受け浪人暮らしをすることになる。永禄三(一五六〇)年、桶狭間の合戦で信長を取り戻そうと東奔西走するが信長には許してもらえない。

この年の秋、気が晴れないまま利家は草木村の鎮守八幡神社にさしかかり、豪農多左衛門に出会う。草木村に前田利家の縁者、前田与十郎がいた。正盛院過去帳に名前あり。利家はしばらくこの地で過ごし村人にも世話になったので、戦で使った刀一本と旗一片を戦勝のお礼と心願成就を祈るため、八幡神社の神前に奉納したいと与十郎に申し出る。その後、八幡神社に神宝としてまつられる。(永禄四年、利家は美濃の斎藤竜興攻略の活躍で信長から信賴を回復。)

神社近くの畑を耕す高齢の男性に刀と旗のことを尋ねてみる。ずつと昔から草木に住んでいるが、見たことも聞いたこともないね」と答えが返ってきた。地元の人でもほとんど知られていない伝説のようだ。

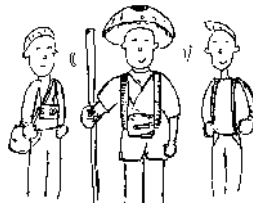
利家は、菅原道真公の末裔である」と公言していたという説がある。前田家の家紋は梅鉢。道真は阿久比の郷を開いたと言われる「英比磨」の祖父。梅は阿久比町の花。二つの共通点から因縁めいたものを感じる。

「草木に立ち寄った場面、NHK大河ドラマ『利家とまつ』でやったかなあ」と友人に尋ねる。「どうでしょう。今度の日曜日からしっかりと見ます」。「そうだね。今は『風林火山』だけだね……」。

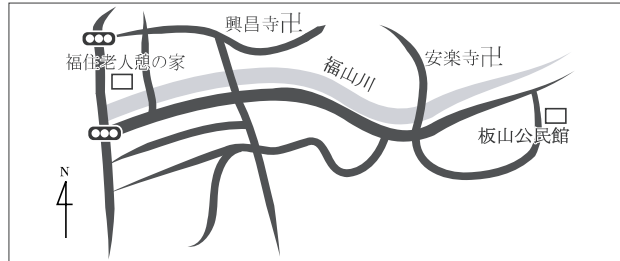
神宝は見ることができなかったが、畑で満開に咲く梅の花を見ることができた。とても美しかった。

シリーズ

阿久比を歩く ④8



岡戸半蔵木像



『半蔵さ、悪かったのう、一時に嫁さと子を亡くしてしまつて。』
『ああ、長いこと子に恵まれなで、待ちこがれておつたに、かかも子も、いっしょに死んじまうとは。』
福住の半蔵さんは、よくよく幸せの薄い星の下に生まれたものだと思ひました。欲も徳もなくして、荒古の阿弥陀堂に涙のお籠りをする日が続きました。見かねた庄屋の義平さんは、そんなに一つ所に伏せ籠つておつては命を失つてしまふ。妻子の菩提を弔うために各地の寺々へお参りに出かけてはどうかとすすめてくれました。『阿久比の昔話 半蔵の発心』から。』
知多四国八十八所霊場三開山の

伝説の地を歩く(岡戸半蔵ゆかりの地)

あぐいぶり旅

一人、福住出身岡戸半蔵ゆかりの地を訪ねた。
岡戸半蔵は亡くなつた妻子をとむらうために諸国巡礼の旅に出る。文政二(一八一九)年に古見(知多市)妙楽寺の亮山上人と出会う。
亮山から文化六(一八〇九)年、弘法大師が夢に現れ『知多の地に札所を開きなさい。協力者として二人の行者を遣わす』と告げられたことを機に、四国霊場を三度巡つた」と聞かされる。半蔵はその話に感銘を受け、知多四国霊場を開くために亮山と行動を共にする。半蔵は弘法大師の木像などを造るために自分の家屋敷、田畑を売り払い資金を作る。
その後、讃岐(香川県)の武田安兵衛が加わり、三人で札所勧誘のため、知多半島の寺を巡る。文政七(一八二四)年に知多四国八十八所の制定を完了する。
弥生三月の暖かい陽ざしを受けながら、福住荒古の畑で土を耕すおばあさんがいたので声を掛けてみた。額にはうつつすらと汗。年を聞くと七

十八歳だという。この辺りに岡戸半蔵が物思いにふけつたと言われる阿弥陀堂がありましたか」と私たちが聞くと、県道を指差して「この道の少し北に行つたところにあつてね、道を広げるときに無くなつてしまつたよ。私が子どもころは、毎月十二日に村の人が集まり、大数珠を回しながら百万遍を唱えたんだよ。だんごを食べるのが毎回楽しみだったかな。半蔵さんの噂はその時によく聞きましたよ。そこにあつた半蔵さんの像は興昌寺手前の堂に移つたよ」と話してくれた。
岡戸半蔵木像がまつられる知多四国第十四番札所、興昌寺行者堂の前に立つ。後ろから白装束の年配グループが近寄る。弘法参りをするために山門の石段を上つて行く。友人が「皆さんが通り過ぎて行くときに半蔵さんが笑つたような気がしたんですよ。札所にみんなが来てくれることがうれしいからですかね」と話し掛ける。「君、なかなかうまいことを言うね。半蔵さんの苦労からすれば、きつとうれしくて涙も出るかもよ」と私が鼻をすすりながら答える。「もしかして、今の話で胸が熱くなつたんですか? ううん。花粉症」。知多路の春は弘法参りで始まるというが、私の春は今年も花粉症から始まつた。
「伝説の地を歩く」は今回で終了します。次回からは「阿久比の道を行く」を連載します。